

家下・關盧沢遺跡

(第2次発掘調査)

平成9年度県営担い手育成基盤整備事業

払沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1998. 3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が家下遺跡と關盧沢遺跡

序

このたび平成9年度に発掘調査を実施した家下遺跡と關廬沢遺跡の報告書を刊行することとなりました。

発掘調査は「県営担い手育成基盤整備事業弘沢地区」に先立って、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から補助金交付を受けて原村教育委員会が実施したものであります。

關廬沢遺跡の陥し穴から発見した炭化材をC14年代測定をおこなったところ、1500年代が得られました。これは中世の狩猟のあり方を知ることができる貴重な資料であると思っています。

両遺跡とも僅かな資料を発見しただけで、幸いに遺跡の中心部から外れていることがわかり、破壊された範囲は最小限にとどまっています。

このたびの発掘にあたり、諏訪地方事務所土地改良課の方々のご配慮、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

原村教育委員会

教育長 大 館 宏

例 言

- 1 本報告は「平成9年度県営担い手育成基盤整備事業弘沢地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村弘沢に所在する家下遺跡と關盧沢遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、家下遺跡の発掘調査は平成9年8月8日から19日に、關盧沢遺跡の発掘調査は平成9年10月20日から11月8日にかけて実施し、整理作業は両遺跡とも平成10年1月5日から3月24日まで行なった。
- 3 遺構の実測は平林とし美、記録と写真撮影は平出一治・平林、石器の実測は平林が行なった。
- 4 執筆は、平出と平林が話し合いのもとに行なった。
- 5 放射性炭素年代測定は株式会社古環境研究所に委託した。
- 6 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、家下遺跡は26、關盧沢遺跡は27の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、原明芳・武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

例 言	
目 次	
I 発掘調査に至る経過	5
II 遺跡の位置と環境	5
III グリッド設定と調査方法	7
IV 家 下 遺 跡	8
V 關 盧 沢 遺 跡	10
VI 結 語	16
引用参考文献	
発掘調査団名簿	
報告書抄録	

I 発掘調査に至る経過

平成5年度から実施されている「県営担い手育成基盤整備事業弘沢地区」は5年目をむかえ、家下・關廬沢両遺跡の保護については、平成8年11月11日に行なわれた「平成9年度県営担い手育成基盤整備事業弘沢地区にかかわる埋蔵文化財保護協議」で協議され、遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいが、農地の整備は将来を考えると必要なことであるし、また、農業者から強い要望もあり「記録保存やむなき」との考えに落ち着き、平成9年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。出席者は長野県教育委員会文化財保護課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者である。

その後、家下遺跡は工事計画に変更が生じ、本調査地点に隣接する個所に土置き場が必要となり、平成8年12月10日に立会い調査をおこなっているが、遺構および遺物を発見するまでにいたらなかったこともあり、土置場としての工事を実施している。

緊急発掘調査は、原村教育委員会が国庫および県費から発掘調査の補助金交付をうけ、また、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託をうけ、家下遺跡は平成9年8月8日から19日、關廬沢遺跡は平成9年10月20日から11月8日にわたり実施した。

II 遺跡の位置と環境

家下遺跡（原村遺跡番号26）と關廬沢遺跡（原村遺跡番号27）は、長野県諏訪郡原村弘沢区の西外れに位置し、裾野の2kmほど上から開析がはじまる大早川の右岸に家下遺跡が、左岸に關廬沢遺跡が立地している。

このあたりは八ヶ岳西麓のほぼ中央に位置し、東西に細長く発達した大小様々の尾根がみられる。それらの尾根上には第1図および表1に示したとおりで、縄文時代中期から後期と平安時代の遺跡群が形成されている地域であることは確かなようである。

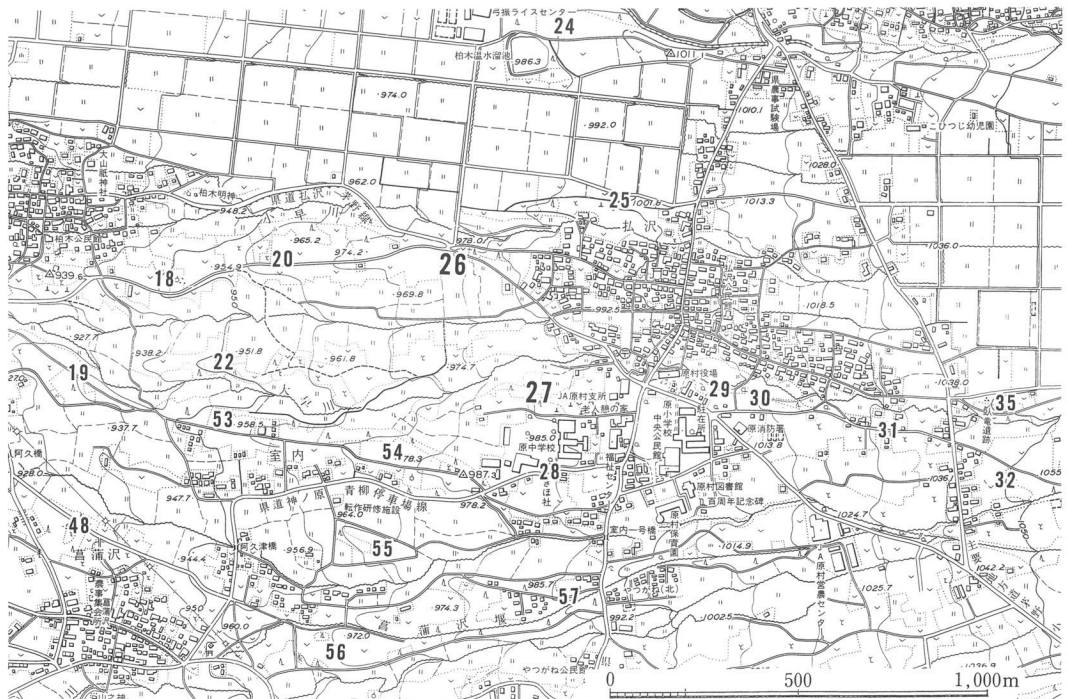
幅の狭い尾根上からその斜面が遺跡で、家下遺跡の北西側は県営圃場整備事業恩前地区の工事ですでに平坦化されているし、關廬沢遺跡の南側は中学校建設の際に掘り取られ、やはり平坦化されている。また、両遺跡とも宅地化が進んできているし、遺跡内には墓地が見られるなどその保存状態は良くない。また、両遺跡とも遺跡内に山林が見られるが、調査対象地の地目は普通畑と農道で、標高は980m前後を測り似通った点が多い。なお、原村における遺跡の高度限界は標高1200m前後のラインである。

家下・關廬沢両遺跡は、諏訪清陵高等学校地歴部考古班が昭和48年から50年にわたって実施した分布調査で発見したもので、『原村誌 上巻』に次のように記載されている。

表1 家下・關盧沢遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見 ◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
14	裏長峰	○		○						◎			平成4年度発掘調査、消滅	
15	程久保		○		◎					◎		○	平成4・5年度発掘調査、消滅	
18	前尾根西					○							昭和51年一部破壊	
19	南平根		○		◎						○		平成9年度発掘調査	
20	前尾根西				◎	◎				◎		○	昭和44・52～54・59・平成9年度発掘調査	
23	恩膳西	○	○		◎	○				◎			昭和62・平成5・6年度発掘調査	
24	恩膳膳		○		◎	◎				○			昭和62年度詳細分布調査	
25	裏尾根					○								
26	家下					○							昭和59・平成9年度発掘調査、平成5年度立会い	
27	關盧沢					○				○	○		昭和62・平成9年度発掘調査	
28	宮平根									○		○		
29	向尾根					○	○			○		○	昭和50・54年度発掘調査	
30	南尾根					○				○				
31	中尾根					○				○				
32	大横道上					◎	◎			○			昭和42・51年度発掘調査	
35	臥竜					◎	◎			○			昭和33・35・36・45・57・平成3・7・8年度発掘調査	
53	雁頭沢					◎				○		○	昭和54・57・63・平成4・5・9年度発掘調査	
54	宮ノ下		○			○				○	○	○	昭和57・58年度発掘調査	
55	中尾根				◎	◎	○			◎		○	平成7年度発掘調査	
56	家前尾根		○	◎	◎	○				◎		○	昭和51年一部破壊、平成7年度発掘調査	
57	久保尾根					◎							昭和51年一部破壊、平成6・7・8年度発掘調査	
95	土井平									◎			平成4年度発掘調査、消滅	



第1図 家下・關盧沢遺跡の位置と付近の遺跡 (1:20,000)

家下遺跡 (払沢)

払沢区の西方に位置する遺跡で、昭和48～50年分布調査で縄文時代中期の土器破片と、平安時代の土師器の破片が採集されているが、遺物の散布範囲を明確にできないでいる。

昭和59年5月に村教育委員会では、道路改良工事に伴う緊急発掘調査を遺跡の西外れで実施しているが、表土は浅く遺物および遺構の発見はない。

關盧沢遺跡 (払沢)

払沢区の西南方に位置する遺跡で、昭和48～50年分布調査で平安時代の土師器の破片が採集されているし、昭和54年度分布調査では、縄文時代中期の土器破片が僅かに採集されている。遺物の散布範囲は狭いようである。

その後、家下遺跡は平成5年11月には県営ほ場整備事業恩前地区に伴う立ち会い調査を行ったが、そこは傾斜の強い北斜面でやはり遺構および遺物を発見するまでに至っていない。また、關盧沢遺跡も原村教育委員会が昭和62年9月に、村道改良工事に伴う緊急発掘調査を実施したが、縄文時代の土器破片と石器、平安時代の土師器の小破片を発見しただけで、遺構を検出するまでには至らなかった。

これまでの調査の結果から両遺跡とも、当地方においては比較的小規模な遺跡と考えられ今日に至っている。

III グリッド設定と調査方法

発掘調査の対象は家下遺跡は第2図、關盧沢遺跡は第4図に示したように、平成9年度県営担い手育成基盤整備事業払沢地区にかかる遺跡の全域におよんでいる。

両遺跡とも発掘に先だち、東西南北(磁北)に軸を合わせたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、西からA区・B区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに2×2mの小地区(グリッド)に分割し、東西方向は西からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを50とし、そのラインを基準に南方向は49・48・47というように南にいくにしたがい小さくなるように、北方向は51・52・53と大きくなるように振分け、それぞれのグリッドを呼ぶこととした。

準備期間中に数回におよぶ踏査を行ない調査方法を検討したが、遺跡の範囲を明確にできないまま、発掘調査を進めることになったため、重機を使用したトレンチ調査からはじめた。トレンチは東西方向、南北方向ともグリッドの軸に合わせ、その幅は重機のバケット幅の1.2～1.3mである。

測量は予め設定した2m四方のグリッドを基準とするやり方方式による。

IV 家下遺跡

1 発掘調査の経過

平成9年8月8日 発掘準備をはじめ。調査地点の草刈りをはじめ。

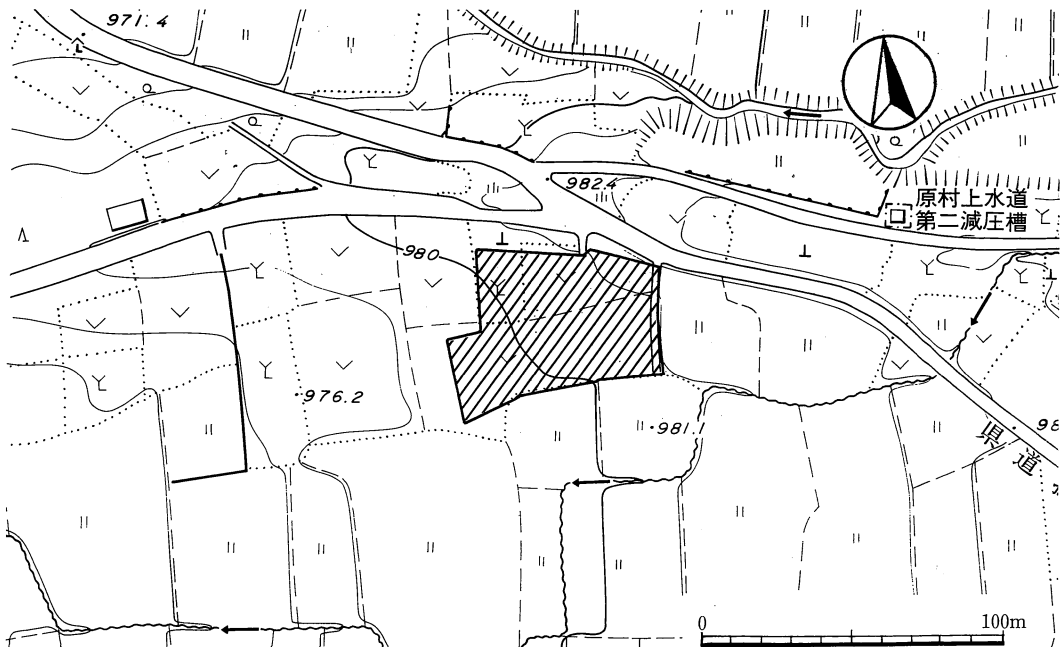
18日 基準杭の設定を行い、重機によるトレンチ掘りをはじめ。打製石斧を採集する。

19日 重機によるトレンチ掘りとトレンチ内の精査を行うが、遺構を検出するまでに至らないため、片付けを行い調査を終了する。

2 調査概要と土層

第3図のグリッド配置図に示したようにトレンチ調査を行ったが、遺構を検出するまでに至らなかった。トレンチ掘りは重機を使用しその方向はグリッドの軸に合わせた。トレンチの総延長は275mで、その面積は330㎡である。調査は原則として層位別に行い、ローム上面ないしは地山の自然礫が出土する面までとした。深さはまちまちで20～100cmを計る。

トレンチ北側（尾根側）は深さ40～100cmでソフトローム層となるが、南側（沢側）は深さ20～40cmで地山の自然礫の出土をみる。層序は上層より、6～20cmの耕作土、25～50cmの黒色土、15cm前後のローム漸移層となるが、不安定な個所の方が多い。また、ハードロームの直上に耕作土がみられる範囲も広く、すでにローム層が削平されたことがあるものと思われる。



第2図 家下遺跡発掘調査区域図・地形図 (1/2,500)

3 発見した遺物 (第8図)

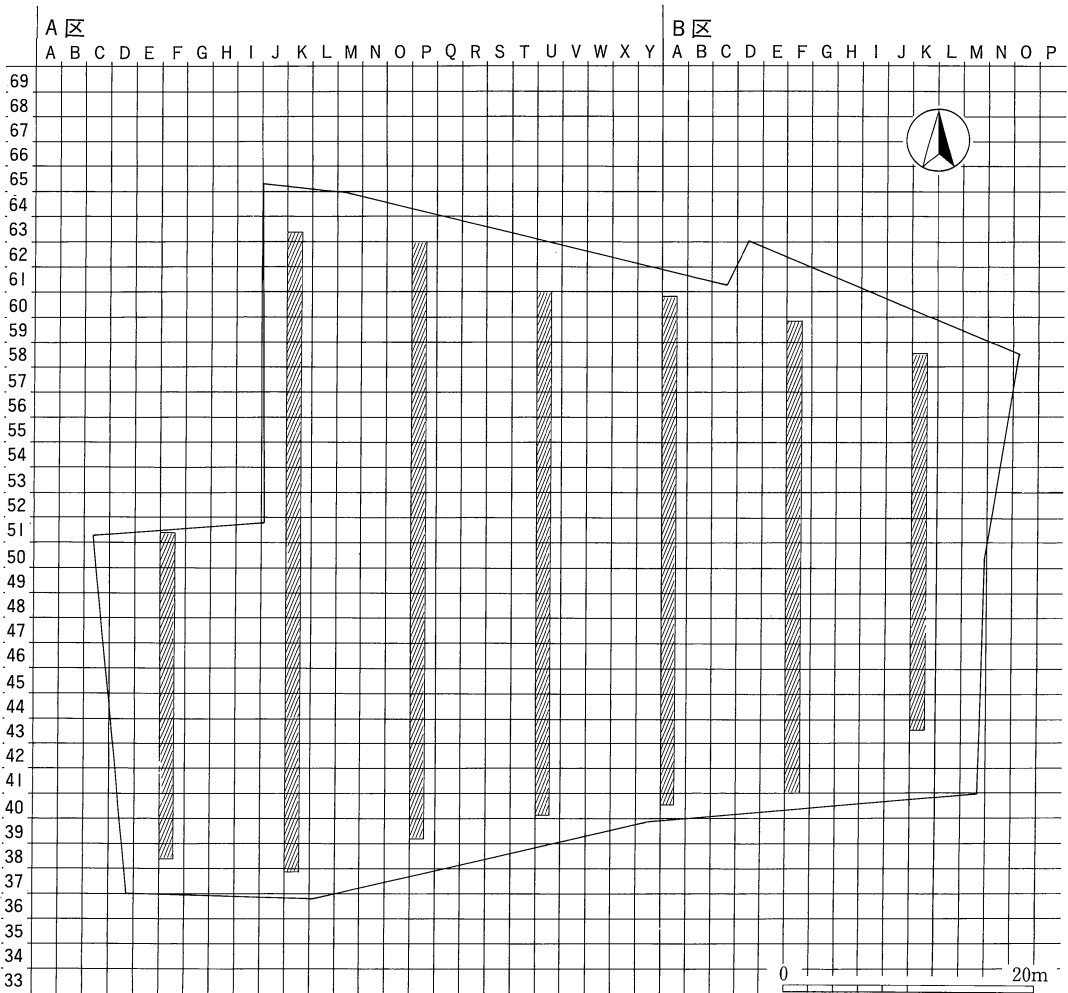
調査の結果、打製石斧1点を発見しただけで遺構を検出するまでには至っていない。

第8図1に示した打製石斧は、粘板岩製で基部を欠損する。当地方に一般的にみられるものである。

4 ま と め

本調査で発見した資料は、縄文時代の打製石斧1点と少なく、遺構を確認するまでには至らなかった。

限られた狭い範囲の調査であったが、その調査地点は尾根先端部の緩やかな南斜面で、遺跡の外縁部にあたることは容易に想像できるもので、遺跡の外縁部のあり方の一端を窺うことができたといえよう。



第3図 家下遺跡グリッド図 (1/600)

V 關 盧 沢 遺 跡

1 発掘調査の経過

平成9年10月20日 発掘準備をはじめる。

21日 基準杭の設定をはじめる。

22日 重機によるトレンチ掘りをはじめる。

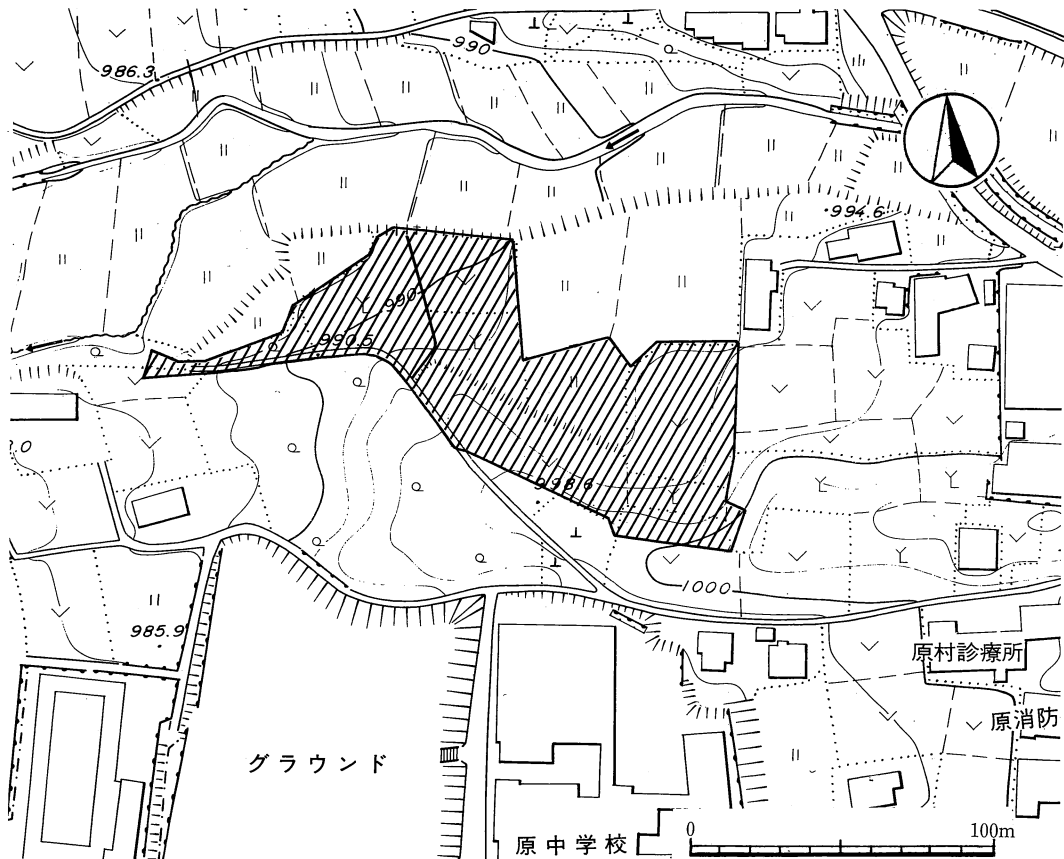
24日 今日からトレンチ内の精査をはじめる。落ち込みの一部を確認し、便宜上小堅穴1と呼ぶことにする。

27日 小堅穴1付近の表土剥ぎを重機で行い、遺構の検出作業をはじめ小堅穴2を検出する。

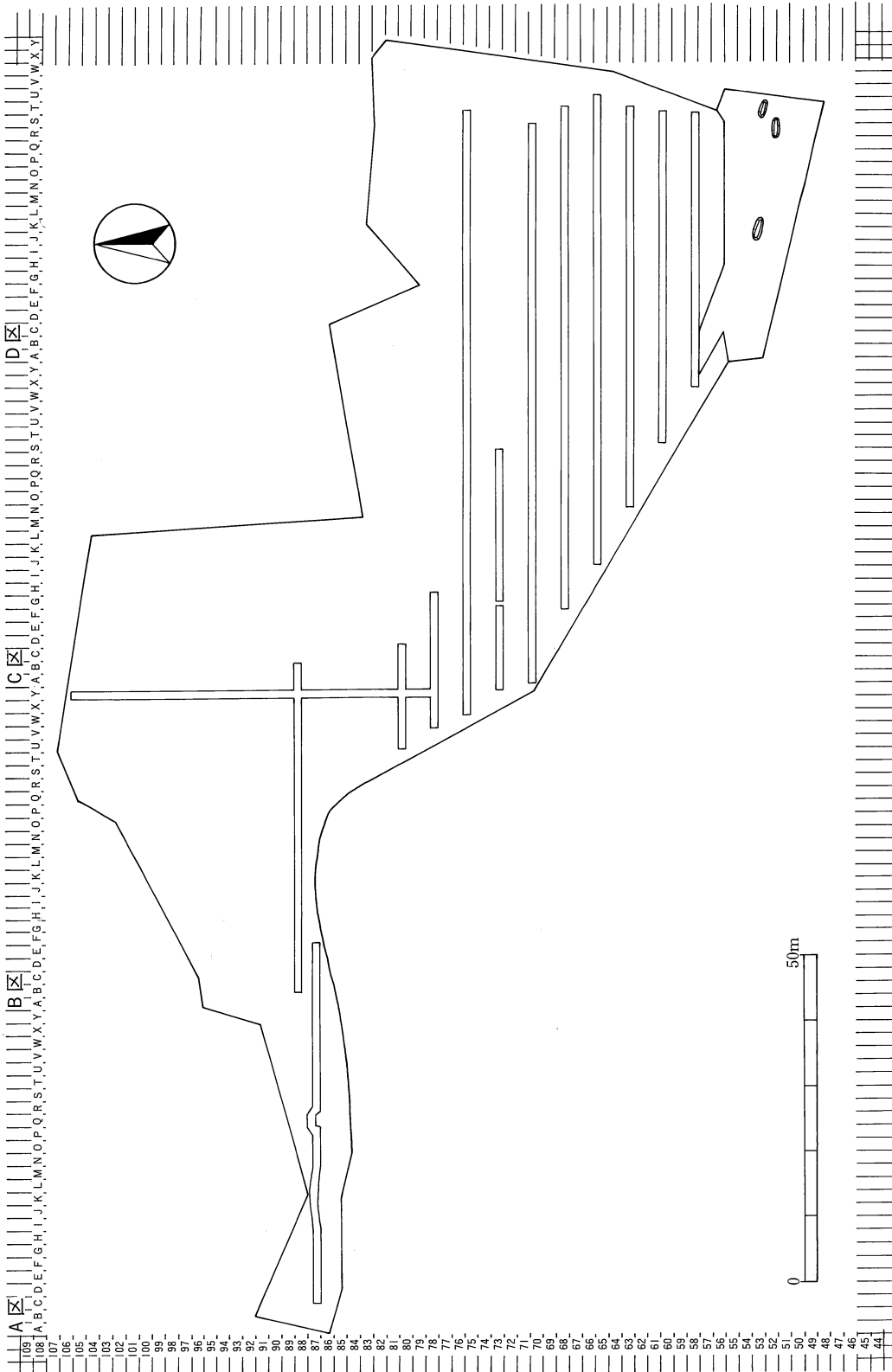
29日 小堅穴1・2の精査をはじめる。

30日 小堅穴3を検出する。

31日 小堅穴3の精査、小堅穴の実測をはじめる。



第4図 關盧沢遺跡発掘調査区域図・地形図 (1/2,500)



第5図 開成沢遺跡グリッド配置図 (1/1,000)

- 11月5日 重機で小竪穴のカッティングを行い、逆茂木痕の精査をはじめめる。
6日 逆茂木痕の精査と石膏で逆茂木痕のかたどりをはじめめる。
7日 引き続き石膏で逆茂木痕のかたどりをを行う。
8日 片付けを行い調査を終了する。

2 調査概要と土層

第5図のグリッド配置図に示したように、調査面積は1,230m²である。はじめに遺跡の範囲を把握するためのトレンチ掘りを重機で行い、トレンチ53ラインで小竪穴の落ち込みを確認した。そこは北斜面であり表土剥ぎを重機で行い遺構の検出作業を進めた結果、小竪穴3基を発見することができた。

小竪穴の調査は最終段階で重機による断ち割りを行い、逆茂木痕と考えられる小穴の断面の観察を行い、大変良好な結果を得ることができた。

調査は原則として層位別に行い、ローム層の上面ないしは地山の自然礫が出土面までとしたが、深さはまちまちで18～195cmを計る。なお、隣接地が宅地であるためか広範囲にわたる攪乱がみられた。トレンチ南側（尾根側）は深さ18～195cmでソフトローム層となり、そこは攪乱が著しい上に、ローム直上が耕作土となる範囲も広く、中にはロームを耕作土としている所も広範囲にみられた。北側（沢側）は深さ25～90cmで地山の自然礫も出土するが、すでに水田造成による切り盛りが著しかった。

3 発見した遺構

小竪穴3基を発見調査したが、埋土の観察は小竪穴の短軸方向で行った。なお、短軸は自然傾斜とほぼ同じ方向であった。

(1) 小竪穴 1 (第5・6図)

尾根の北斜面にあたるDK-52・DI-53・DJ-53・DK-53の4グリッドにまたがっている。埋土はレンズ状堆積が認められ自然埋没と思われる。

平面形は350×111cmの楕円形を呈し、深さは深い所で153cmを計る。底面はほぼ平で長方形となりその規模は320×48cmである。壁は底から22～67cmはしっかり立ち上がっているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。この状態からみると、当時の平面形は底の形状に近いものであったと思われる。底面には小穴が6個穿たれている。

調査の最終段階で重機による断ち割りを行い、小穴の断面観察をした結果、小穴は逆茂木を「打ち込んだ」痕跡と理解できるものである。小穴1は壁際に片寄っていたため、断面図に示すことはできなかったが、他の小穴とほぼ同じ状態であった。小穴1～4・6をみると、先端を角錐状に極めて鋭く尖らせた逆茂木を「打ち込んだ」痕跡である。その打ち込みは深く、角錐状に

尖らせたところから丸太部分までが打ち込まれているようである。小穴5は平面規模は小さい上にその深さは浅く、他の小穴とは違っている。これは安易な考えであるが、逆茂木を打ち込みはじめたが何らかの理由で中止したものと考えることができよう。

遺物の発見は皆無である。

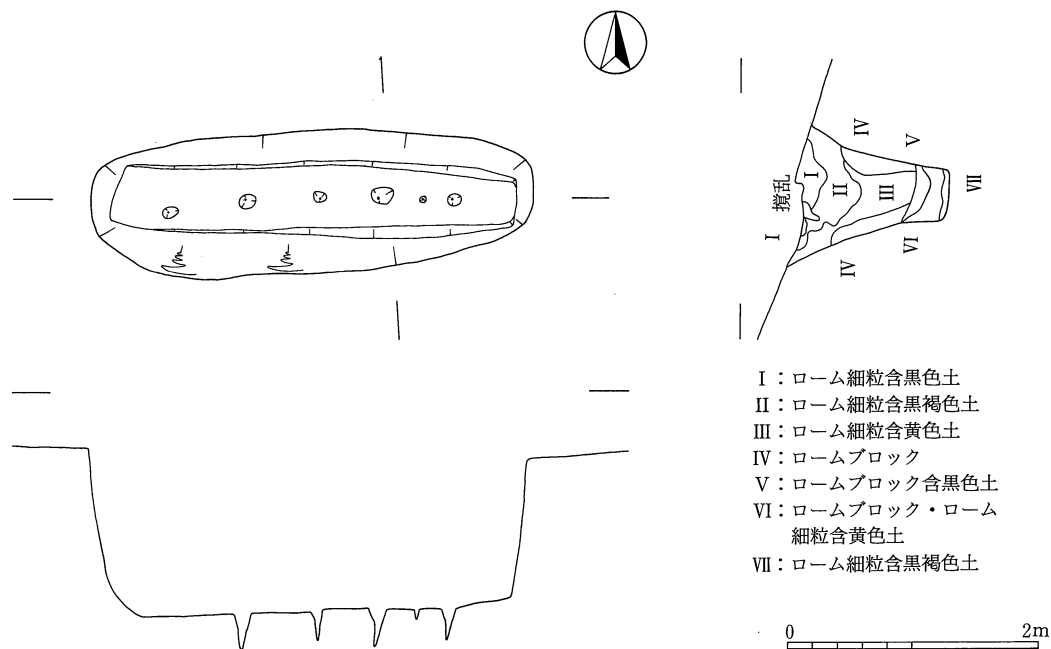
(2) 小 豎 穴 2 (第5・7図)

尾根の北斜面にあたるDQ-51・DR-51・DS-51・DQ-52・DR-52・DS-52の6グリッドにまたがっている。埋土はレンズ状堆積が認められ自然埋没と思われる。

平面形は326×104cmの楕円形を呈し、深さは深い所で138cmを計る。底面は傾斜しているが、その傾きは自然傾斜と同様で、形状は長方形を呈し288×32cmの規模である。壁は底から15～41cmはしっかり立ち上がっているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。この状態からみると、当時の平面形は底の形状に近いものであったと思われる。底面には小穴が5個穿たれている。

小穴は小豎穴1同様に逆茂木を「打ち込んだ」痕跡と理解できるもので、その先端はより鋭利に作りだされていたようである。

遺物の発見は皆無である。



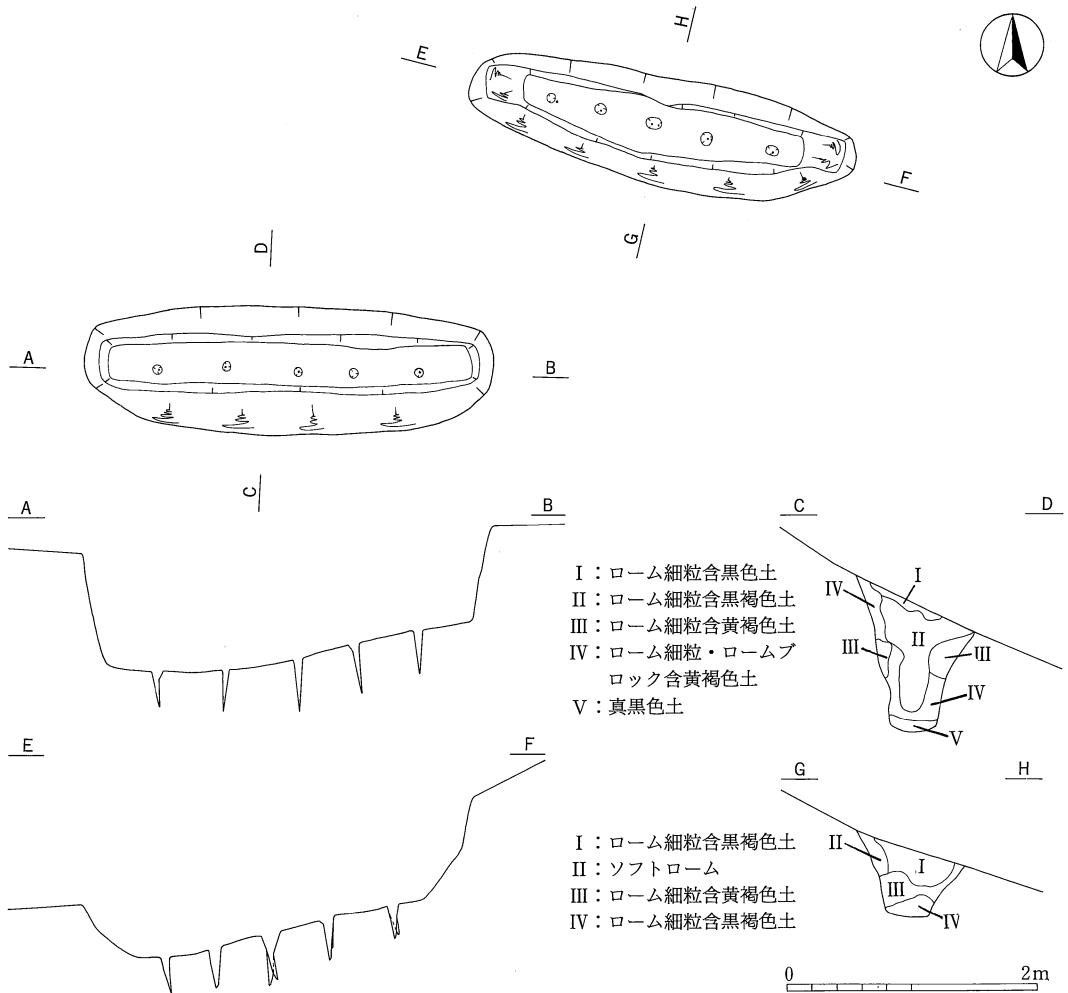
第6図 關盧沢遺跡小豎穴1実測図 (1/60)

(3) 小 豎 穴 3 (第5・7図)

尾根の北斜面にあたるDS-52・DT-52・DS-53・DT-53の4グリッドにまたがっている。埋土はレンズ状堆積が認められ自然埋没と思われる。

平面形は310×87cmの楕円形を呈し、深さは深い所で125cmを計る。底面は傾斜しているが、その傾きは自然傾斜と同様で、形状は楕円形に近い長方形で227×41cmの規模である。壁は底面から4～37cmは比較的しっかり立ち上がり、それより上はスリ鉢状となり壁土の落下が著しかったようである。この状態からみると、当時の平面形は底の形状に近いものであったと思われる。小豎穴1・2に比べると崩れが著しかったのか全体にだらだらしている。底面には小穴が5個穿たれている。

小穴は小豎穴1・2同様に逆茂木を「打ち込んだ」痕跡と理解できるもので、その先端は鋭利に作り出されている。小穴1～3は新・旧2回の打ち込みが認められた。底面における検出時点



第7図 關盧沢遺跡小豎穴2・3実測図 (1/60)

では一つの小穴であったが、その断面観察で重複関係が明確に認められた。小穴3・5はその先端の方向が明らかに違っている。小穴4は逆茂木の太さに違いがあったためか、その痕跡が二重となっている。小穴5個の内3個に重複が認められたことからみて、この陥し穴は少なくとも2回にわたり使用されたものと思われる。

遺物の発見は皆無である。

4 発見した遺物

発見した遺物は少ないが、縄文時代の石器と平安時代の土師器がある。若干の説明を加えてみたい。

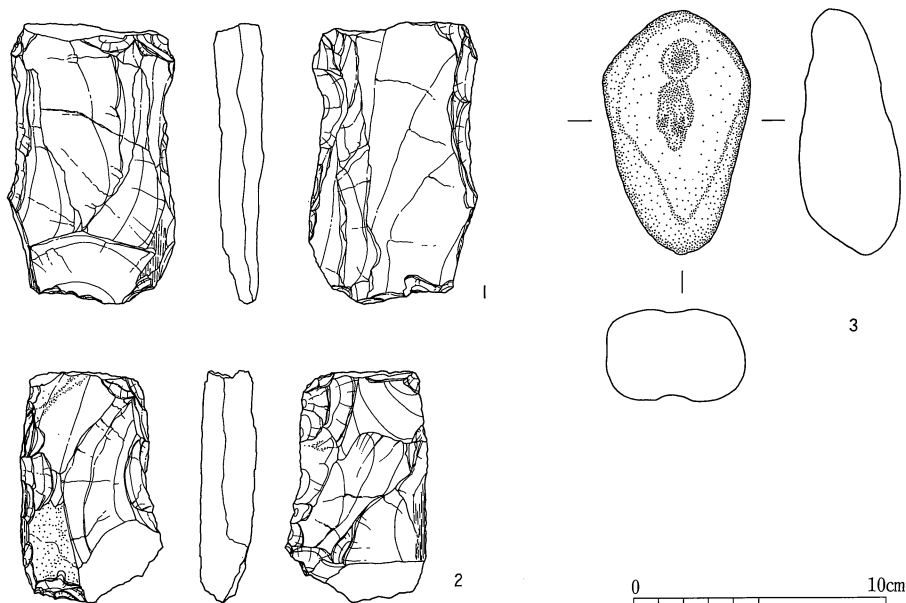
(1) 縄文時代の遺物 (第8図)

縄文時代の石器は、打製石斧1点と凹石1点がある。

第8図2の打製石斧は硬砂岩製で刃部と基部を欠損し、側辺には使用によると思われる摩耗が見られる。3の凹石はやや小振りの輝石安山岩の転石が素材の一般的にみられるもので、表面には2、裏面に1つの凹穴がある。なお凹穴は打痕によるものである。2点とも表面採集したものである。

(2) 平安時代の遺物

平安時代の土師器は、坏の口縁部破片1点と甕の胴部破片1点がある。小破片のため図示できなかった。坏の破片はトレンチ精査の折に出土し、甕の破片は表面採集したものである。



第8図 家下・關盧沢遺跡出土石器実測図 (1:3)

1: 家下遺跡 2・3: 關盧沢遺跡

5 ま と め

発見した小竪穴の用途は陥し穴であり、長軸が310～350cm、短軸は87～111cmを計る細長い楕円形の平面プランで、深さは125～153cmと深く、横断面はV字状を呈している。底面はほぼ平で、その底面には逆茂木を「打ち込んだ」と理解できる小穴が5～6本みられるもので、南平遺跡でB型に分類したものである。

陥し穴の調査はその最終段階で重機による断ち割りを行い、逆茂木を打ち込んだと考えられる小穴の観察を詳細に行い、良好な調査結果を得ることができた。

それは、先端を角錐状に極めて鋭く尖らせた逆茂木を打ち込んだ痕跡であるが、その多くの場合は4つの面を作り出していることが観察でき、何らかの金属製工具をもってしなければ不可能ではないかと考えられる状態であった。小穴の中には逆茂木の一部が炭化した状態でみつかったものがあり、そのうちの1点を株式会社古環境研究所に委託して放射性炭素年代測定にかけたところ、16世紀という結果が導きだされた。それは中世から近世初頭頃に帰属することになり、陥し穴を研究する上で良好な資料になるものと思っている。

VI 結 語

家下遺跡・關盧沢遺跡ともそれぞれ2次調査であったが、遺跡の一部分という限られた範囲であった。

家下遺跡は調査の結果、遺構を検出するまでには至らず、打製石斧1点だけの発見に終わったが、遺跡の外縁部における性格の一端を窺うことができたものと思っている。

關盧沢遺跡では小竪穴3基を発見したが、調査の結果小竪穴は陥し穴であり、底面の小穴の断ち割り調査で極めて良好な結果をえている。

測定結果を知らされた時には、正直いってその新しいことに驚かされた。くどくなるが繰り返すと、小穴の中から出土した炭化材を放射性炭素年代測定にかけたところ、16世紀という結果が導きだされた。南平遺跡の陥し穴から出土した炭化材2点の測定結果も16世紀であり、關盧沢遺跡と南平遺跡から出土した炭化材の測定結果が一致したことは、本遺跡で発見調査したタイプの陥し穴は16世紀に構築されたことになる。まだまだ多くの問題点を残しているが、今後の陥し穴研究上に大きな問題提起ができたものと思っている。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

引用参考文献

- 1974 07 諏訪清陵高等学校地歴部考古班「原村の考古学的調査 上」(『土』8)
- 1980 03 長野県教育委員会『昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
- 1985 07 原村役場『原村誌 上巻』
- 1989 03 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財12 關盧沢遺跡 村道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書』
- 1994 03 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財小報12 家下遺跡調査報告書 平成5年度県営ほ場整備事業恩前地区に伴う立ち会い調査』

家下遺跡発掘調査団名簿

第2次発掘調査

団 長 大館 宏 (原村教育委員会教育長)

調査担当者 平出 一治

調 査 員 平林とし美

調査参加者 発掘作業 久根 種則 吉川 幸子 野明 昭子
日達今朝江 (順不同)

事 務 局 原村教育委員会 中村 正英 (教育次長) 津金 一臣 (庶務係長)
伊藤 佳江 平出 一治 (文化財係長) 平林とし美 石川 美樹
櫻井 秀雄 (県派遣主事)

關盧沢遺跡発掘調査団名簿

第2次発掘調査

団 長 大館 宏 (原村教育委員会教育長)

調査担当者 平出 一治

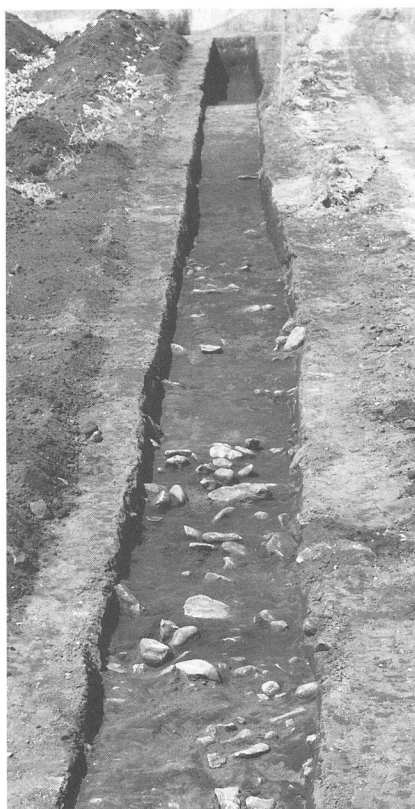
調 査 員 平林とし美

調査参加者 発掘作業 清水 正進 小池 英男 小島 政雄 小林 喜重
朝日 治郎 宮坂とし子 五味八代江 坂本ちづる
小林 りえ (順不同)

整理作業 朝日 治郎

事 務 局 原村教育委員会 中村 正英 (教育次長) 津金 一臣 (庶務係長)
伊藤 佳江 平出 一治 (文化財係長) 平林とし美 石川 美樹
櫻井 秀雄 (県派遣主事)

家 下 遺 跡



ト レ ン チ (南から)



発 掘 区 全 景 (南から)



発 掘 風 景 (南から)



ト レ ン チ (南西から)

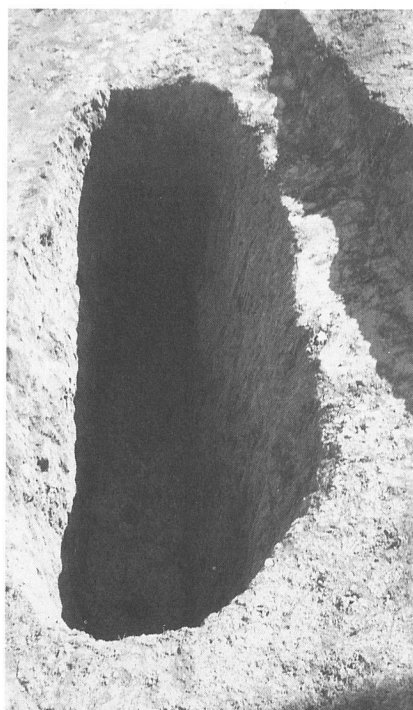
關 廬 沢 遺 跡



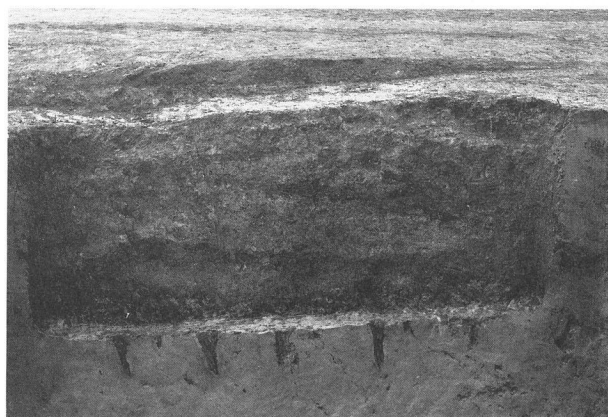
ト レ ン チ (西から)



発 掘 風 景 (西から)



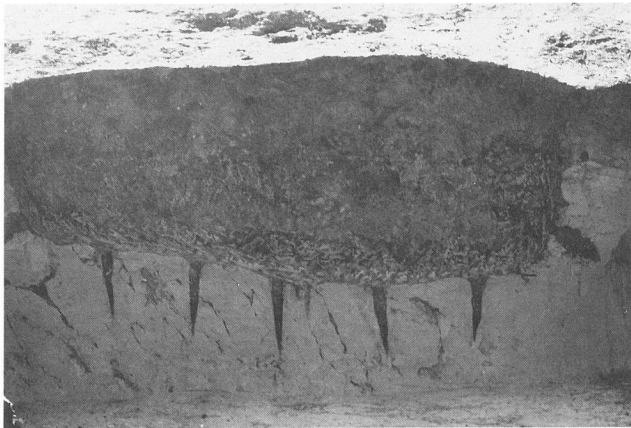
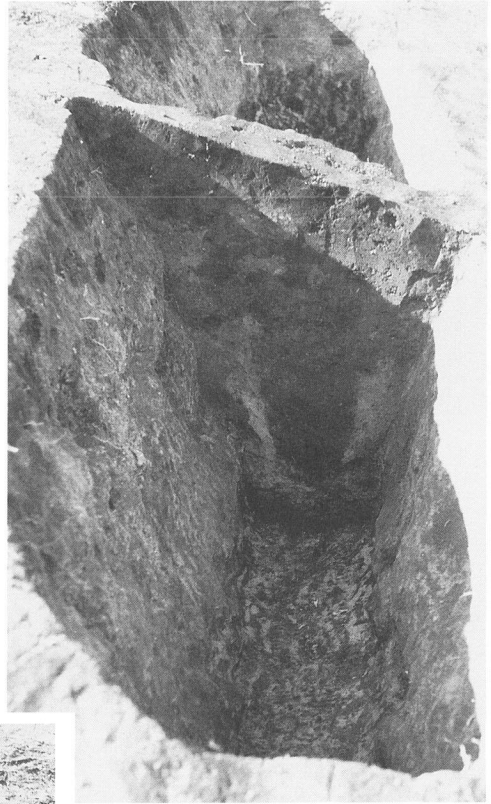
小 豎 穴 1 全 景 (西から)



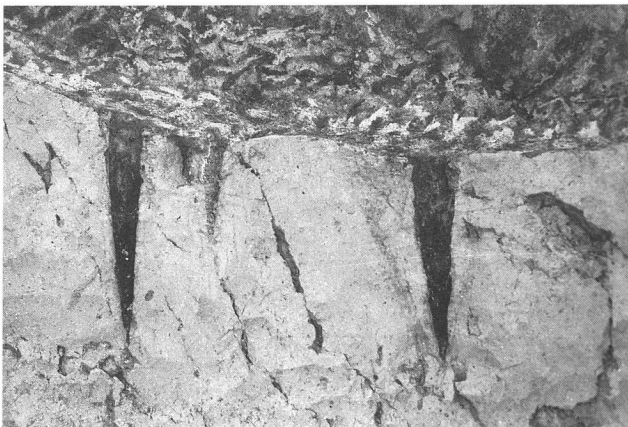
小 豎 穴 1 逆 茂 木 痕 カ ッ テ ィ ン グ 状 況 (北から)

關 廬 沢 遺 跡

小 豎 穴 2 土 層 (西 从 从)



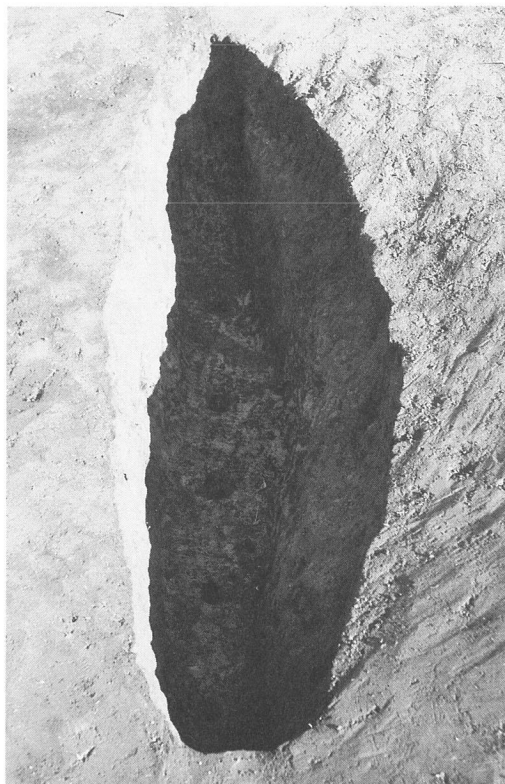
小 豎 穴 2 逆 茂 木 痕
カ ッ テ ィ ン グ 状 況 (北 从 从)



小 豎 穴 2 逆 茂 木 痕
カ ッ テ ィ ン グ 状 況 (北 从 从)



小竪穴3 プラン検出状態 (西から)



小竪穴3 全景 (西から)



小竪穴3 逆茂木痕
カッティング状況
(北から)

報告書抄録

ふりがな	いえした・あきほざわいせき							
書名	家下・關盧沢遺跡（第2次発掘調査）							
副書名	平成9年度県営担い手育成基盤整備事業弘沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	原村の埋蔵文化財							
シリーズ番号	46							
編著者名	平出 一治 平林とし美							
編集機関	原村教育委員会							
所在地	〒391-0192 長野県諏訪郡原村12080 Tel 0266-79-2111							
発行年月日	西暦 1998年03月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いえ 家 した 下	ながのけんすわぐん 長野県諏訪郡 はらむらほらいざわ 原村弘沢	3637	26	35度 57分 49秒	138度 12分 50秒	19970808 ～ 19970819	330	平成9年度県 営担い手育成 基盤整備事業 弘沢地区
あき 關 ほ 盧 さわ 沢	ながのけんすわぐん 長野県諏訪郡 はらむらほらいざわ 原村弘沢	3637	27	35度 57分 38秒	138度 13分 3秒	19971020 ～ 19971108	1,230	平成9年度県 営担い手育成 基盤整備事業 弘沢地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
家 下 關 盧 沢	包蔵地 包蔵地	縄文時代 平安時代 中世	小竪穴 3基		打製石斧 中期土器破片 凹石 黒曜石剝片 土師器破片		小竪穴は陥し 穴である。逆 茂木炭化材の 放射性炭素年 代測定の結果 中世の遺構で あることがわ かった。	

原村の埋蔵文化財46

家下・關盧沢遺跡（第2次発掘調査）

平成9年度県営担い手育成基盤整備事業
払沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成10年3月

発行 原村教育委員会
〒391-0192 長野県諏訪郡原村
TEL 0266-79-2111

印刷 もえぎ企画書籍
〒394-0043 岡谷市御倉町2-21
TEL 0266-22-4892

